様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 ３０ 日現在

機関番号：８２６１９
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2011～2014
課題番号：２３５２０９４３

研究課題名（和文）家形埴輪の群構成と階層性からみた東アジアにおける古墳葬送儀礼に関する基礎的研究

研究課題名（英文）Fundamental Research on Funeral Rites at Tumuli in East Asia Analyzed from Group Composition and Hierarchy of House-shaped Haniwa (Clay figure)

研究代表者
古谷　毅（FURUYA, TAKESHI）

独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館・学芸研究部列品管理課・主任研究員

研究者番号：４０２３８６９７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：　家形埴輪は多様な埴輪群の中枢部に配置され、形象埴輪の中で最初に出現し前方後円墳の終焉まで造られた代表的な埴輪で、古墳時代集落や居宅の景観と他界観(世界観)が象徴的に反映しているとみられる。
　本研究では家形埴輪の群構成・階層性と東アジア農耕社会の建築・家形造形品との比較・検討から、日本列島の地域統合に大きな役割を果たした古墳葬送儀礼を分析し、古代国家形成期にあたる古墳時代の他界観(世界観)の解明を目標とした。形象埴輪群・家形土器の調査を実施すると共に、情報共有化のために古代史研究者を交えて古代手工業史における埴輪生産や家形埴輪の儀礼的意義の検討や韓国・家形土器と比較・検討する研究会を開催した。

研究成果の概要（英文）：The house-shaped haniwa (clay figure) is representative of a wide variety of figural haniwa. They were the first to appear among other types of haniwa and continued to be produced until the creation of keyhole-shaped tombs ceased. It is believed they symbolically reflect how settlements and houses looked, or else people's view of the world (after death) of the Kofun Period (ca. mid-3rd century-ca. 7th century).This research was conducted to analyze funeral rites at tumuli, which played a significant role in regional integration of the Japanese archipelago, with the aim of revealing people's view of the world (after death) in the Kofun period, during which the nation of Japan was being formed. The research was carried out by examining the group composition and hierarchy of the house-shaped haniwa, and comparing them with the architecture and house-shaped objects found in ancient agricultural societies in East Asia.

研究分野：日本考古学

キーワード：日本考古学　古墳時代　東アジア　家形埴輪　家形土器　　葬送儀礼　埴輪生産　　古代手工業生産

１．研究開始当初の背景

古墳出現と共に成立した埴輪は、当初古墳葬送儀礼の場である墳頂部に樹立されるが、前期中頃から中期中葉にかけて器財埴輪を中心とした各種の形象埴輪が出現し、次第に器種が増加する。戦前から、葬送儀礼を直接反映した有力な考古資料と考えられてきたが、その構成と配置・配列は多量樹立と埋蔵施設の盗掘等による資料の保存状態に阻まれて実態は明らかではなかった。しかし、1990 年代以降の史跡整備等による大規模発掘調査で具体的な群構成と配置・配列に関する調査が進み、従来の断片的資料に基づいた編年中心の分析から、本来の存在形態を復原する群構成と配置・配列分析への研究環境が整いつつあった。

このような動向を踏まえ、申請者は古墳葬送儀礼に関わる考古資料の一つである形象埴輪群について、科学研究費補助金の交付を受けて調査・分析を進めてきた【A：平成 12 ～ 14(2000 ～ 2002) 年度基盤研究 C [12610422]、B：平成 17～19(2005～2007) 年度基盤研究B[17320127]】[以下、研究A・B]。研究A・Bでは、中期を中心とした形象埴輪樹立古墳出土埴輪を対象とし、東北から九州地方の 43 遺跡(古墳)について、現地(所蔵機関)における出土資料の悉皆調査による分類・分析により、形象埴輪群と土器・土製品等の古墳における群構成と配置・配列の実態を初めて把握した。また、従来から予測されたように形象埴輪における群構成の中心がもっとも早く出現する家形埴輪であることも確認した。ところが、家形埴輪群は大半の事例において、予想を上廻るバラエティをもつ多様で多数の個体からなることが判明し、個々の古墳でも同一の埴輪群構成はまったくないことも明らかとなった。その結果、従来の分析は形状把握が容易な比較的大型の破片資料を中心とした調査･研究方法で、断片的な破片資料の確認が未了であったため、各報告書等が本来の埴輪群構成の存在形態と少なからず乖離した資料認識状況にあったことも判明した。

他方、家形埴輪は早くから奈良県佐味田宝塚古墳・東大寺山古墳出土の家屋文鏡・家形飾環頭大刀の家形造形品との共通点が注目されていた。ところが、副葬品の銅鏡・大刀や家形土器等の性格の検討を踏まえた分析例は少なく、弥生時代の家形土器・建築絵画や朝鮮半島の家形土器等の性格を踏まえた研究や、文献記録に残る建築語彙の分析(木村 1988 など)との考古学的な比較・検討もほとんどなかった。また、家形埴輪は古墳時代建築を反映するとみられてきたが、多くの集落遺跡の調査において確認された遺構の規模や構成と一致しない例の存在が指摘されていた。

しかし近年、竪穴住居･高床建物の他に埋没建物の調査等で壁立式建物の存在が確認され、古墳時代集落構成の具体像が明らかにされつつある。最近では、朝鮮半島南部(韓国)の古墳時代に併行する三国時代の集落遺跡と日本列島の古墳時代集落との比較研究(武末他編 2010 など)が進展し、具体的に家形埴輪群と集落遺跡における建築群の比較が可能な段階となっていた。

【引用文献】

・木村徳国　1988　『上代語にもとづく日本建築史の研究』中央公論美術出版
・武末純一･安在皓編 2010『日韓集落研究の新たな視角を求めてⅡ』日韓集落研究会

２．研究の目的

日本列島の古代国家形成期にあたる古墳時代における東アジアでも独自性が高い葬送儀礼を家形埴輪の群構成と階層性から分析・検討する。とくに東アジア農耕社会の集落建築や家形造形品との比較・検討から、古墳時代社会の安定と成長に大きな役割を果たしたと考えられる古墳葬送儀礼の復原的

分析を行い、その背景にある古墳時代他界観(世界観)を解明するための基礎研究の確立を目的とする。

また、これまでの研究A・Bの調査・研究成果と併せ、調査資料(調書・写真)の整理・分析を進めると共に、既存のフィルム撮影画像のデジタル化を進め、総合研究報告書の作成準備を進める。

３．研究の方法

研究代表者は依頼した連携研究者・研究協力者からなる研究組織で、研究A・Bと同じく肉眼観察を研究の中心におき、出土埴輪群の分類に基づいた全体構成を把握することに努める。このため、同一古墳出土埴輪群に関する資料は極力全点の確認の上、破片資料に至るまで等しく資料調査を行い、器種ごとに分担を設けて記録化・資料化する方針を採る。ある特定の古墳の埴輪群構成について論じようとする場合、完形品であれ破片であれ、そこに含まれる情報には質的優劣はないはずだからである。

さらに、分類・抽出した各地の古墳出土埴輪群の分析結果を踏まえ、選択した良好な家形埴輪資料を精査し、本来の埴輪樹立時の群構成と本来の配置・配列およびその階層性を復原する。とくに、出土位置が明確な良好な発掘資料を軸に、九州・近畿・関東地方を中心に実施する。また、研究支援者を依頼して、東京国立博物館所蔵資料の有力な家形埴輪資料の整理分析を行い、資料化を図る。

一方、年度毎に連携研究者・研究協力者の協力を得て年数回の研究会を開催する。また、研究会では日本古代史研究者を招聘し、文献記録や日韓の集落研究の情報を共有し、本研究の調査成果に対する評価や意見交換を実施して、問題点の掘り下げを図った。２カ年目には、韓国で集落遺跡研究の現状を調査し、日韓の集落遺跡建物群や家形造形品と家形埴輪の比較・検討を試みる研究会を開催する。

４．研究成果

まず、これまでの研究A・Bで抽出された良好な資料を中心に、補足調査および重要な関連資料について、各年度毎に追加および補足調査を行った。主な調査先は、茨木市立文化財資料館・大阪府教育委員会文化財調査事務・堺市文化財事務所・高槻市立今城塚古代歴史館・小松市埋蔵文化財センター・広島大学考古学研究室・東広島市教育文化振興事業団・野洲町教育委員会文化財事務所および韓国・国立中央博物館で、所蔵埴輪・家形土器の写真撮影・調書作成を通じて資料の把握と資料化のための基礎資料を得た。

また、2013(平成 25)年には、韓国・嶺南文化財研究院と共同で「韓日家形土器・埴輪の比較と歴史的意義：韓日家形土器・埴輪(하니와) 共同研究會」を開催し、家形埴輪と朝鮮半島出土の家形土器について、研究成果と課題について相互に報告すると共に、討論を通じて問題点について認識を深めた(嶺南文化財研究院・東京国立博物館科学研究費(基盤 C)研究会 2013)。

一方、研究A・Bでは、古墳時代中期の５世紀の埴輪生産においては窖窯焼成事例の幅広い普及を確認することができ、窖窯焼成技術が埴輪生産体制にもっとも大きな画期として導入されたことを再認識した。とくに東日本では、東海・仙台地方を除いて須恵器窯が確認できないにも関わらず、中期後半段階においては窖窯焼成が埴輪生産の標準技術となり、畿内地方以外では圧倒的に須恵器窯よりも埴輪窯が多く分布することが予想された。そこで埴輪生産体制を考える上では、他の窯業生産製品の分析・研究成果との比較・検討が必須であると考え、古墳時代から古代の窯業生産の問題点である生産・製作・供給(流通)など重要テーマを採り挙げて検討した。これらの先行研究は埴輪生産に通底する問題点を多く内包し、また次項で述べる手工業生産として

埴輪を分析する視点の重要性を検討するために有効な研究事例を確認することができた。とくに須恵器・瓦生産に関する代表的研究方法と埴輪生産体制の研究方法との方法論や概念の分析・検討が課題となった。

第一は生産主体の問題である。埴輪生産体制が大きく変化する窖窯焼成技術の導入とその技術史的意義を検討するために、窖窯の出現･地方拡散･地域定着の視点から、古墳時代から平安時代までの主要な窯業生産研究を検討した。いずれの手工業生産においても、いわゆる恒常的な生産と一回性的な臨時生産を想定することができるが、とくに地方における埴輪生産は一回性的な臨時生産の性格が強く、須恵器・瓦生産研究における操業開始に関する契機の問題が注目された。

第二は、派遣・上番などの技術移転に関する概念の問題で、いわゆる工人移動論の検討である。とくに須恵器生産の分野で進められてきた工人移動パターン論(菱田 1992 他)については、繰り返し検討の俎上に挙げられた。

第三には、いまだ埴輪生産論の中で十分に活かされているとは云えない古代手工業生産論を位置づけるために学史的な回顧を試みた。なかでも日本古代史研究以外では、埴輪生産体制に関して初めてまとまった研究を行った轟俊二郎氏の研究を中心に検討を進めた。

これらの課題については年度ごとに、適宜、古代史研究者を交えた研究会を開催して検討を加えた。研究会では各回ごとにテーマを設定し、研究代表者・連携研究者および研究協力者が分担して課題について研究発表を行い、その際には必ずコメンテーターを立てて問題点の顕在化を図った。

そこでは、調査参加者間において既存の調査成果と問題点の共有化を図るとともに、研究目的の一つである古代手工業史への位置づけや家形埴輪の意義について検討のために、調査期間中にも半日～一日を割いて情報の共有化および意見交換と討論を行った。

最終年度には、研究成果報告書(東京国立博物館 2015)を刊行し、実施した調査および研究会の経過と内容の詳細を報告した。

【引用文献】

・菱田哲郎 1992「須恵器生産の拡散と工人の動向」『考古学研究』第 39 巻 3 号、考古学研究会
・東京国立博物館 2015［下記：５．図書②参照］
・嶺南文化財研究院・東京国立博物館科学研究費(基盤 C)研究会 2013［下記：５．図書①参照］

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 16 件）

①古谷　毅「家形埴輪の構造・変遷と分析視角」『埴輪研究会誌』第 15 号、埴輪研究会、pp.129‐145、2011(平成 23)年 5 月 29 日
②犬木　努「城山１号墳の埴輪列小考 ―後円部墳頂の埴輪列をめぐって―」『埴輪研究会誌』第 15 号、埴輪研究会、pp.79‐92、2011(平成 23)年５月 29 日
③犬木　努「埴輪の編年 ②東日本の円筒埴輪」『古墳時代の考古学１ 古墳時代史の枠組み』同成社、pp.187‐200、2011(平成 23)年 12 月 25 日
④古谷　毅「古墳文化の特質と展開および地域性」『日本考古学会 第 74 回例会(シンポジウム 南九州の古墳文化)予稿集』日本考古学会、pp.5‐11、2012(平成 24)年 2 月 23 日
⑤犬木努・近藤麻美「西都原 171 号墳出土蓋形埴輪の再検討―立ち飾り部の製作技法を中心として―」『宮崎県立西都原考古博物館研究紀要』第８号、宮崎県立西都原考古博物

館、pp.23‐34、2012(平成 24)年３月 31 日
⑥犬木努・近藤麻美「下総型人物埴輪の新例―大阪大谷大学博物館所蔵品から―」『大阪大谷大学文化財研究』第 12 号,大阪大谷大学文化財学科、pp.1‐9、2012(平成 24)年３月 31 日
⑦犬木　努「埴輪からみた南九州と近畿－西都原古墳群を中心として－」『南九州とヤマト王権－日向・大隅の古墳－』（大阪府立近つ飛鳥博物館図録 58）大阪府立近つ飛鳥博物館、pp.129‐138、2012(平成 24)年 10 月 15 日
⑧犬木　努「柴又八幡神社古墳の埴輪を読み解く」『平成 24 年度地域史フォーラム 古代東国と柴又八幡神社古墳』葛飾区郷土と天文の博物館、pp.31‐40、2012(平成 24)年 10 月 25 日
⑨犬木　努「後期古墳出土埴輪の諸問題―関東地方を中心として―」『後期埴輪の特質とその地域的展開』中国四国前方後円墳研究会、pp.１‐20、2012(平成 24)年 12 月 1 日
⑩犬木　努「下総型埴輪の風景―形態変化・工人編制・分布域―」『埴輪研究会誌』第 17 号、埴輪研究会、pp.1‐37、2013(平成 25)年５月 25 日
⑪古谷　毅「家形埴輪研究史と研究成果および課題 －機能と性格－」『韓日家形土器・埴輪の比較と歴史的意義(韓日家形土器･埴輪(하니와) 共同研究會』韓国･嶺南文化財研究院・東京国立博物館科学研究費(基盤 C)研究会、pp.60‐70、2013(平成 25)年 6 月 15 日
⑫犬木　努「日本における古墳葬送儀礼と埴輪について」『韓日家形土器・埴輪の比較と歴史的意義(韓日家形土器･埴輪(하니와) 共同研究會』韓国･嶺南文化財研究院・東京国立博物館科学研究費(基盤 C)研究会、pp.116‐126、2013(平成 25)年 6 月 15 日
⑬犬木　努「同工品識別による埴輪生産構造論－「下総型埴輪」論の現段階－」『古墳出土品がうつし出す工房の風景』（大阪大谷大学博物館報告書第 61 冊）大阪大谷大学博物館、2014(平成 26)年３月 31 日
⑭犬木　努「轟俊二郎が採集した埴輪片－『埴輪研究第１冊』の原風景－」『博古研究』第 47 号、博古研究会、pp.9‐26、2014(平成 26)年４月 15 日
⑮古谷　毅「中小古墳と大型古墳－再整理からみた七観古墳の歴史的位置－」『巨大古墳あらわる‐履中天皇陵古墳を考える‐』(第四回百舌鳥古墳群講演会記録集)堺市文化財講演会録第７集、堺市文化観光局文化部 文化財課、pp.27‐73、2015(平成 27)年 2 月 27 日
⑯犬木　努「西都原古墳群の埴輪―「平成調査」から「大正調査」へ―」『西都原古墳群総括報告書』宮崎県立西都原考古博物館、pp.93‐114、2015(平成 27)年３月 31 日

〔学会発表〕（計５件）
①犬木　努「西都原古墳群出土埴輪の再検討―同工品／作業分担／工人編制」第 81 回古墳時代研究会、2012(平成 24)年 11 月３日
②犬木　努「房総地域における埴輪の地域色―下総型埴輪を中心として―」埴輪研究会第 13 回研究大会、日本大学文理学部、2013(平成 25)年２月２日
③古谷　毅「利根川中流域両岸の古墳時代前半の様相－下総北西部の方形周溝墓と古墳群－」流山市立博物館　企画展前方後方墳と方墳　関連講座第 3 回、流山市立博物館、2013(平成 25)年 3 月 2 日
④古谷　毅「西都原古墳群出土 重要文化財埴輪子持家・船と国宝 金銅装馬具－その特徴と歴史的意義－」宮崎県立西都原考古博物館「特別展 西都原の 100 年 考古博の 10 年展」特別講演会、宮崎県立西都原考古博物館、2014(平成 26)年 5 月 11 日
⑤犬木　努「西都原の埴輪から何がわかるのか？―男狭穂塚・女狭穂塚の時代―」宮崎県立西都原考古博物館「特別展 西都原の 100

年 考古博の 10 年展」特別講演会、宮崎県立西都原考古博物館、2014(平成 26)年８月 10 日

〔図書〕（計２件）
①古谷毅・朴升圭編『韓日家形土器・埴輪の比較と歴史的意義(韓日家形土器・埴輪(하니와) 共同研究會』韓国･嶺南文化財研究院・東京国立博物館科学研究費(基盤 C)研究会、pp.1‐130、2013(平成 25)年 6 月 15 日
②古谷　毅編『家形埴輪の群構成と階層性からみた東アジアにおける古墳葬送儀礼に関する基礎的研究』平成 23～26(2011～2014)年度科学研究費基盤研究Ｃ(2)[研究課題番号: 23520943]成果報告書、東京国立博物館、pp.1‐226・カラー図版 8 頁、2015(平成 27)年 3 月 31 日

〔産業財産権〕
○出願状況　な　し

○取得状況　な　し

〔その他〕
ホームページ等　　な　し

６．研究組織
(1) 研究代表者　古谷　毅（FURUYA,TAKESHI）
研究者番号：40238607
独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館・学芸研究部列品管理課・主任研究員

(2)研究分担者　な　し

(3) 連携研究者　犬木　努（INUKI,TUTOMU）
研究者番号：40270417
大阪大谷大学・文学部・教授